

13.06.29

世田谷区基本構想シンポジウム
基調講演「参加と包摂に向けて」

世田谷区基本構想審議会座長代理
首都大学東京 教授 宮台真司

【基本構想とは何か】

みなさん、こんにちは。楽しい週末にこのようにたくさんお集まりいただいたことに感謝申し上げます。私は、世田谷区基本構想の素案をまとめた世田谷区基本構想審議会の、座長代理を勤めて参りました、首都大学東京・都市教養学部教授の宮台真司と申します。

世田谷区基本構想は20年後の未来に向けた区政の羅針盤です。日本には憲法と憲章の区別ができない方々が多いのですが、基本構想は、世田谷区民がどんな理念 = 価値に従って世田谷区の行政を操縦するかという指針であって、憲法的役割を「目指した」ものです。

国連憲章がそうであるようにメンバー同士の参加目的の確認が「憲章」だとすると、日本国憲法や合衆国憲法がそうであるように、市民が統治権力に何をさせるかを記したものが「憲法」です。専門的に言えば、「制限規範を前提にした授権規範」なのです。

基本構想にそうした性格を与えるために、区民参加のワークショップや意見提案発表会の内容を踏まえた上で、公募区民委員を含めた多数の基本構想審議会委員が1年半のものをかけて、場合によっては深夜まで徹底的な議論をし、基本構想素案にこぎつけました。

思えば、東日本大震災と原発事故は、任せて文句を言うだけの「お任せ民主主義」が、我々の命を守らない事実を明らかにしました。引き受けて考えることを旨とした「参加民主主義」へのシフトが求められたのです。そのために基本構想への取り組みが開始されました。

私の役割は、今さわりを申し上げた、基本構想素案の背後にある事実認識と価値意識を、区民の皆さまと改めて再確認する営みを、サポートすることです。これから先、皆さまが基本構想を読まれる際に、明確なイメージを抱けるようにするための御案内だとも言えます。

憲法においては前文がきわめて重要な意味を持つのも同じで、今回の基本構想素案においても前文がきわめて大きな意味を持ちます。[...前文を引用...]この前文に書かれてあることのシェアを中心に、これから短い時間お話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

【非常時の常態化】

まず、第一のキーワードは、**非常時の常態化**です。東日本大震災の後、地震学会や地質学会の認識が示されましたが、東海や東南海における巨大地震がいつ起こっても不思議ではない状況です。地震を忘れることができる平時は、とくに「今は昔」となりました。

それだけではありません。グローバル化するなか「ヒト・モノ・カネの自由化」が進み、「産業構造改革を遂げない限りは新興国と競争せざるを得ない状態」になりました。すると、必然的に「中間層の分解」と「共同体の空洞化」が深刻化していくこととなります。

「中間層の分解」と「共同体の空洞化」により、ポジションを失った人々は **鬱屈化** し、将来に怯える人々は **不安化** するようになります。かくして、鬱屈した人々の溜飲を下げ、不安な人々に承認による安心を与えるような、浅ましい「ポピュリズム」が、議会制民主主義を支配しがちになります。

具体的に言えば、外交問題・外国人問題では「ヘイトスピーカー（外国人を口汚く喧る人々）」が蔓延し、内政問題・近隣問題については「クレーマー（私的利害を公共的だと叫ぶ人々）」が蔓延し、政治や行政に影響を与えるようになります。そうした事態は先進各国に共通して生じています。

巨大震災への恐れと、暴走するポピュリズムへの恐れは、奇しくも共通の処方箋によって初めて対処可能になります。それが **参加と包摂** です。実は、元々、民主主義の本体は「多数派政治」ではなく **参加と包摂** なのです。多数決は「最後の手打ち」に過ぎないということです。

【 **参加** による フィクションのまゆ破り 】

次に、今申し上げた **参加と包摂** のうち、**参加** というキーワードについて申し述べます。

参加 とは **引き受けて考えること** です。「参加民主主義」という場合の参加です。その重大な意義は **フィクションのまゆを破ること** にあります。

先進国は原発推進国だらけですが、「絶対安全神話」や「全量再処理神話」や「原発安価神話」のような、先進国ではありえない出鱈目なフィクションをベースに原発推進政策を続けたのは、ただ一国、日本だけでした。それに気づいて、原発推進論者の私自身が「日本に限っては原発推進はダメ」とシフトしたのです。

似た話ですが、先進国はどこでも、どんな電力会社からどんな電源を購入するか選べます。安いものを選ぶ人もいれば、原子力が好きな人は原発電源を選びます。日本だけは独占企業体からの強制購入しかなく、東電の巨大発電所が事故でポシャると一貫の終り(計画停電の連発)というテイタラクでした。

こうした日本だけのスペシャルな枠組みは、「自分たちの社会がどのように回っているのか」について私たちが観察をしないがゆえの **フィクションのまゆ** によってこそ、支えられてきました。大震災はこうした **フィクションのまゆ** 恐ろしさを、まさに私たちに突きつけたのです。

政治学の最先端は、こうした **フィクションのまゆ** を破るには、情報公開と熟議が不可欠であることを示しています。ちなみに、日本では熟議が誤解されていますが、じっくり話し合うことではありません。特別な目的と仕組に基づいた話し合いです。どんな話し合いでしょうか。

具体的に言えば、あらかじめ存在するイデオロギーの配置を前提にした数合わせではなく、事実や価値についての気づきを目指した討議なのです。それによって、例えば、日本的審議会制度にありがちな、行政官僚がメンバーを選定した時点で確定する事前のシナリオを、排除します。

例えば、コンセンサス会議というデンマーク発のやり方では、対立的立場の専門家の意見や専門家同士の討議を市民が観察した上、市民と専門家との間の質疑応答をも加えて **科学の民主化** を行った上、最終的には専門家を排して、市民だけが決定に参加します。

こうしたやり方を通じて、極端さや勇壮さを競うだけの、**事実認識**が出鱈目なポピュリストの主張を、完全に無力化すると同時に、新しい事実や価値についての気づきを獲得して、共同体自治のベースになる **我々** を構築します。つまり、**民主主義を通じて民主主義をバージョンアップする営み** なのです。

こうした参加民主主義は議会軽視ではありません。そうした認識は先進各国では全くあり得ません。なぜか。市民熟議を経た **フィクションのまゆ破り** や **事実や価値の新たな気づき** は、それを前提にした議会の討議水準を圧倒的に上昇させ、原発事故で面目を失うような恥ずかしいテイタラクを回避できるからです。

【 包摂 による 地域の分断の克服 】

続いて「参加と包摂」という場合の「包摂」について申し上げます。実証的な研究が明らかにしているように、理不尽に噴き上がるヘイトスピーカーやクレイマーは、「孤独ゆえに」鬱屈と不安を抱えた存在です。彼らの意見を「無力化」するだけでは問題が残ります。

そこで **鬱屈や不安** を互いに緩和できる人間関係の中へと、彼らを **包摂** することが、極めて重要な課題になります。実は、熟議には、地域の人間関係を、顔の見えるものへと変化させ、カテゴリーに基づいたステレオタイプを、解消させるという、重大な目的もあるのです。

昨今のヘイトスピーチのルーツは、関西での「特権叩き」です。関西では歴史的経緯ゆえに被差別者に対する分厚い特権が設けられてきました。その一部はやがて行き過ぎたものとなりましたが、それに過剰に噴き上がったのが、地域の経緯を知らない新住民とそれに類する個室的存在でした。

一般に旧住民と新住民の分断があると、副作用を撒き散らして問題解決を困難にするような感情的噴き上がり、起こりがちとなります。 **地域の分断の克服**こそが根本的な処方箋になるという実証的な事実を踏まえることについても、複数の政治学者を呼んだ上での熟議と、それを通じた気づきが役立ちます。

また、日本人にも立派な人と浅ましい人がいるように、外国人にも立派な人もいれば浅ましい人もいます。外国人との交流経験が豊かならば、浅ましい日本人と立派な外国人のどちらが友人として相応しいか自明です。同じことは若者と年配者にも言えます。年配者も、浅ましい年配者より立派な若者を好むはずです。

地域の分断は、交流経験を妨げ、勘違いのステレオタイプを蔓延させます。熟議には、交流経験を通じた経験値の上昇により、「外国人だから、日本人だから、老人だから、若者だから...」といった未熟な思い込みを、緩和させる働きもあります。繰り返すと、嘖き上がりの浅ましさは、経験値の低さの表れなのです。

【パイが小さくなる未来の幸せに向けて】

未来の豊かさに思いを託して、苦しみを我慢する時代は、終わりました。小さくなるパイを分けあって、幸せにならねばならない時代です。それには「我々が住むのはこういう街だから、それじゃなく別のものが必要」という評価が不可欠になります。

これは、当事者意識を欠いた行政官僚にはできません。まして中央の霞ヶ関官僚にはできません。全国一律基準やその受け売りは、リアリティを欠くフィクションです。参加によるフィクションのまゆ破りと、包摂による地域の分断の克服なしに、地域住民の幸せはありえません。これからの摂理です。

世田谷区基本構想は、この摂理を踏まえた世田谷区民が、**参加と包摂**を旨とした共同体自治を構築・維持していくという、重大な意志表明につながります。従って、行政に対する意志表示をしたから終わりというものではなく、継続した関わりが今後求められます。私の話は以上です。ご静聴ありがとうございました。